

献辞

唐渡興宜教授は、2007年3月31日付けをもって定年退職される。教授は永年にわたり本学部の学生、大学院生の教育指導にあたられるとともに、多くの研究成果を挙げられ、北海道大学とわが大学院経済学研究科・経済学部の発展のために多大の貢献をなされた。この功績に報いるため、本誌を教授の退任記念号として献呈したい。

教授は一橋大学経済学部を1970年3月に卒業の後、直ちに同大学大学院経済学研究科・理論経済学専攻に進学された。当時のマルクス経済学の理論状況は恐慌論研究が隆盛を極め、恐慌論の研究を精力的に行っていた故種瀬 茂教授の厳格な指導の下で恐慌論の研究者としての途へと歩まれた。1975年3月に一橋大学大学院経済学研究科博士課程を単位取得退学、同年4月に迎えられて北海道大学経済学部講師としてご就任され、その後1977年4月に助教授、86年4月に教授に昇任された。

本学赴任後の5年間は教養部において経済学の授業を担当され、その後経済学部、大学院経済学研究科において経済原論（政治経済学）の授業科目を担当された。教授は今日までの30年余の永きにわたり、その豊富な学識と高い見識とをもって、学部学生、大学院生の教育、指導にあたられ、とりわけ大学院経済学研究科では数多くの優れた研究者を養成し、世に送り出されている。

教授の研究経歴と業績は基本的には二つの系譜が存在する。教授がまず取り組まれた研究テーマは経済学批判体系としての恐慌論の体系的な研究であった。その研究成果は1979年に『世界市場恐慌論』として刊行された。マルクスの経済学批判体系プランは1.資本、2.土地所有、3.賃労働、4.国家、5.外国貿易、6.世界市場と恐慌、からなっているが、このプランの最後の項目である「世界市場と恐慌」まで恐慌論を体系的に展開したのは本書が初であり、未だにこの水準に迫るものは存在していない。世界市場恐慌として恐慌論を展開するためには、既存の経済原論研究としての恐慌論の枠組みを超えた理論展開が必要で、国際金融論、国際（市場）価値論、外国為替理論などの他分野の成果を総合する努力がそこに反映されている。

教授が次に取り組まれた研究テーマは国家論である。世界市場恐慌論の展開においてマルクスの後半体系をより具体化していく上で、マルクス経済学の分野で弱い環をなしていたのが国家論であり、恐慌論研究と並んで国家論の経済学的展開を同時並行的に進められてきた。その研究成果が『資本の力と国家の理論』として翌1980年に上梓された。国家論の研究には経済学だけでは限界があり、政治学、社会学における国家論研究の成果も組み入れるべきであるという信念の開花がそこに見られる。

恐慌論研究が基本的には資本主義の動的な運動を研究するものであるとすれば、国家論は資本主義の構造を問題とするものであった。教授はこの二つの研究を土台としてその後の研究を展開されることとなった。

一つは恐慌論研究の系譜に連なるものとして、大不況・長期停滞論の研究である。資本主義経済は突発的な膨張運動の結果としての突発的な収縮運動（恐慌）という運動を示すだけでなく、長期的停滞という傾向も示す。恐慌と長期停滞という二つの運動は資本主義の発展段階に規定されて、歴史的に異なった現われ方をする。20世紀から21世紀にかけての長期停滞を現段階の資本主義の特質に照らして明らかにするというのが現在行っておられる研究である。その成果が論文「資本主義の新しい段階」（『政経研究』）として公表されている。

もう一つは国家論及び資本主義の構造に関する研究の系譜に属するもので、物象化論、所有論の研究である。この研究は『政治経済学の冒険 現象学的マルクス主義へのプレリュード』として1996年に北海道大学経済学部から研究叢書として刊行されている。現在は所有論の体系的展開を準備されている。

教授は教育者、研究者としての多大な貢献にとどまらず、学会の運営や学内行政についても大いに尽力された。経済理論学会の幹事を1995年から7年間歴任し、経済理論学会北海道部会を設立し、北海道における理論経済学の発展と若手研究者の育成に力を注がれてきた。また1991年から1993年には北海道大学評議員、さらに2001年4月から2002年8月まで北海道大学大学院経済学研究科長・経済学部長の要職を務められ、北海道大学と経済学研究科及び経済学部の発展に寄与された。特に本研究科・学部は2000年にいわゆる大学院重点化を実施したが、その初期の多難な時期の教授の献身はここに特記して感謝申し上げる。教授が定年を迎えられ本学を去られることは惜別の念にたえない。いまは、ただ、これまでも増す学問上のご活躍を祈念するのみである。

2006年11月

北海道大学大学院経済学研究科長 井上久志